

伊奈波さん

伊奈波神社社報

【平成24年 1月号】 No.18



お正月社頭風景



伊奈波神社宮司

東道人

祥輝

清々しく爽やかな歳旦を迎へ、稔りある歳をと祈福しつつ、本年新たな歳を氏子崇敬者の皆さまと迎へましたことに、まず以つて、心より新年を神清な心でお祝ひ申し上げたいと存じ上げます。

さて、祈りはすべての民族が、生命の限り神々に祈りを捧げ、豊かな年であるように、地域の人びと共どもに祈り祀つてきた世界がある。その共同体の中に村長むらぢやうがあり、その経験や体験をもとに、生きる人びとの生活を導いて来たありさまは、その土地に住む人びとの生活をみれば、よく理解できたのである。ところが、近年近代化の掛声のもと、その云うオサの姿が消へていったことは、地域の共同体そのものが崩壊して、日本の伝統文化が消滅しつつある。文化伝統は遠い祖先たちが築きあげてきた（生きる知恵）であり、その中で営為豊かに育まれて来た姿は、もはや風前の灯と化しているように思われてならない。すべての発展は、故郷を捨てることから日本の近代化があった。それ故に消えゆく

故郷は懐かしい山河の中に郷人の姿も見当たらなくなつた。すべての発展のあととは故郷ですら忘れさられて消へゆく姿を今に伝へている。文明はすべてを喪失させ、人の心さえも無くしてしまったことは、日本の伝統文化は求められなくなつてきたことに、将来への展望が望まれなくなつてきたのである。日本人が日本人としてあるべき姿を蘇えらせなければならぬ。もう一度、日本人の精神や文化を日本古典を通じて、二〇〇〇年の姿を見直しなければならぬのではないかと思う。日本には『古事記』や『万葉集』など多くの古典文学があり、特に『古事記』は他国には伝承しない特色ある説話・伝説である。あれだけの文学を私どもの祖先が、伝誦してきた素晴らしい国民の文学遺産である。豊かな文学が栄へた日本は、それだけの精神が生きずき、私たちの体内にやどるものがほとばしっているのである。決して、歴史の浅い国柄ではなく、遠い祖先たちの見事に開花させた国であり、まことに美し国土である。日本の文化や精神を再び見直し、開直す心を養ひ、明日への飛躍へと踏み台に立ち、そして本年をより豊かな歳でありますよう、心より祈つて止みません。



■拜殿



■拜殿の屋根葺き替え

拜殿・燈籠お屋根葺き替え
平成二十年の第一期工事神門・回廊のお屋根葺き替えに引き続き、平成二十三年四月十一日の工事安全祈願祭に始まった拜殿・燈籠四ヶ所のお屋根銅板葺き替え工事が十二月六日に完成を見ることになりました。前回の葺き替えは、昭和五十六年に檜皮で葺き替えがなされましたが、今回は神門屋根同様、将来を見据え銅板にて葺き替えられました。ご奉賛賜りました方々のご芳名を記した銅板も葺き納めさせて頂きました。この新たなお屋根の下で、清々しくお参り頂けたらと存じます。



■葺き替え以前の拜殿



■燈籠の屋根葺き替え

以降、本殿・幣殿・校倉の屋根葺き替えも進めて参りますので、今後とも変わらぬご支援を心よりお願い申し上げます。

和歌三神社献詠披講祭

六月十一日午後二時、伊奈波神社・岐阜新聞・岐阜放送主催による献詠披講祭が和歌三神社（御祭神―住吉神・玉津島神・人丸神）前にて執り行われました。県内外より短歌九二首、俳句一〇〇句の応募のなか、短歌二十三首、俳句二十三句が入選し、入選作品を選者代表がご神前で詠みあげ奉納しました。

短歌の部／小林 峯夫・広瀬 美智子・後藤 すみ子
俳句の部／加藤 水万・伊藤 百雲・鈴木 飛鳥女



■和歌三神社

短歌の部

特選

花束の入りたる箱を届けくる宅配の人うれしきうなり
伊佐地 博子

娘の愚痴をびしやりと一言しかりつけ微熱のような気
川出 香世子

山と積む瓦礫に妻を探す人セーターの前後違へたりき
白木 キクへ

秀逸

- 池の面を幾何学模様にしめけるおたまじゃくしのまあるきいのち 安田 昌代
- 山並みは黄いろにかすみ太陽が銀にかがやく黄砂の吹く日 井上 秀夫
- 震災にて春のまつりは中止なりからくり人形うなだれしまま 辻 絹枝
- 母の爪草取る夏は減るらしも仲ふるかたばみ茂るおおばこ 杉山 洋子
- 譲られし席を譲りてほのほと紫陽花色に心満ちくる 阿部 三男
- 木天蓼の白き葉裏の柔らかく風に戦はば飛騨の夏見ゆ 後藤キヌエ
- 水張田が明るく映す小宇宙やまが動けるちぎれ雲しずむ 吉田 節子
- 膝を病む友へ電話の呼び出し音歩みをはかりゆつくりと待つ 大栗紀美子
- うす暗き農機具小屋をふたすじの翳鮮かに子ツバメは発つ 森 圭子
- どの家も木蓮咲けると見上げつづ坂のほりゆく菩提寺への道 深貝喜代子

入選

- 坂 田鶴子 桐山 俊雄 鬼頭 一枝 藤村 一重
- 岩佐ハル子 梅田 周作 出町 昭子 安福 佳子
- 邦幡 愛子 福井 一芳

俳句の部

特選

柳絮飛ぶ結界の無き青空に
青谷 百合子

神馬像の足に撫せ艶新樹光
河合 愛子

山車反転夜目にも白き紙吹雪
寺田 好子

秀逸

- サラサラと杜に風あり竹の秋 五十川直靖
- 宮の杜若葉の影に招魂碑 三輪 巴枝
- 筆談に笑顔の母や花菖蒲 久米 治美
- 震災地の友癒したく蘭贈る 葦原 月子
- 梅檀の花へ川風吹き上がる 林 恵子
- 一番茶の手採みの母の背まろし 片岡 和子
- 急ぐ子に苞にと持たす筍飯 久松加代子
- 札所まで里の峠ほととぎす 小里 幸剛
- 都合よく耳遠くなる母の日よ 名和よちゑ
- 濃き影に目高の動き映し出す 岡 八重子

入選

- 横山 茂子 新町 恵子 浅野 あや
- 服部 真六 はやし 碧 宇佐見 俊二
- 杉野 ちゑ子 金武 房子 櫻井 容光女
- 山田 可津美



岩戸の塩奉納

七月四日正午、伊勢・二見町の住民らでつくる「二見みしお会」が、『岩戸の塩』を奉納した。岩戸の塩は伊勢市二見ヶ浦で汲み上げられた海水を長時間煮つめて精製され、ミネラル分が多く含んでおり体に良いとされており、当社では祭典で使用しています。奉納は平成十三年から始まり、今年で十回目を迎えました。この塩は当社でもお買い求めできます。
376g・二四〇〇円
125g・一〇〇〇円



黒龍神社例祭

当社の境内に奥深く静まる黒龍神社の一年に一度の例祭が七月二十四日に盛大に斎行されました。黒龍神社は、古く天文八年（一五三九）に伊奈波神社が当鎮座地に遷座される以前から当地に鎮まり、福德増進・諸願成就の神様として篤く信仰されてきました。当日は、たくさんのお供え物が崇敬者より捧げられ岐阜県外から黒龍大神を慕う約二〇名以上が参列し、厳粛に執り行われました。



みそぎ神事

七月三十日午後七時、社務所前にて大祓神事が斎行されました。始めに、人形・切麻を用いて罪穢れを祓い、引き続き大きな茅の輪を左から右へと和歌（水無月の夏越しの祓いする人は、千年の命延ぶといふなり）を唱えながら潜った。その後、祭壇の前で神職が大祓詞を何度も奏上し、併せて短冊に願いを込めた七月短冊祈禱も執り行われた。無病息災を祈る人たちの列が続いた。



提灯まつり

八月十四日夕刻、笹提灯奉納奉告祭が第一鳥居前にて執り行われ、四地区から町内毎に赤丸提灯で飾られた笹竹を持ち、神社に集まった。赤丸提灯は、ヤマタノオロチの目を表していると云われており、町内安全や無病息災を祈りお祓いをうけた。笹竹に付けられた百個以上の赤丸提灯が参道を赤く照らした。



吉田流神楽講習会

伊奈波神社では、祭典の時に奉納する神楽の講習会を毎年、吉田流神楽を伝承する笠井家より指導を受けています。この講習会は昭和三十二年より毎年開催しており、今年で五十五回目を迎えました。講習会には伊奈波神社の神職・巫女と、高山市の櫻山八幡宮の巫女が参加し、八月二十三日から三日間指導を受け、最終日には練習曲を奉納しました。

奉納曲目
式神楽 速神楽 四方拝
剣の相舞 鉦剣の舞



松尾流献茶祭

十二月一日午前十時、松尾流による献茶祭が本殿にて二〇〇名余りの参列のなか厳粛に執り行われました。名古屋を中心に活動をしている松尾流・松尾宗典宗匠のお手前により、濃茶・薄茶が奉られ、宮司祝詞奏上、神楽奉奏、そして玉串を捧げ祈念した。献茶祭は今年で九十六回を数えた。祭典後、参集殿にて会員の方々により抹茶が振る舞われました。



七五三詣

今年も七五三を迎えた多くの子供達で境内が賑わいました。境内を走り回る子供達も御祈祷では落ち着いた様子で、連れ添う家族は、健やかな成長をお祈りした。



七五三ファッションショー

七月十七日、今年で四回目となる七五三ファッションショーが参集殿にて開催されました。今年七五三を迎える子供達と母親がモデルとなり、特設のステージ上で新作の衣装を身にまとい披露。終始会場をにぎわせ大盛況に終わりました。

忠魂碑慰霊祭

九月二十三日午後三時、日露戦争（明治三十七年二月から三十八年九月）で亡くなられた戦病死者三八三七柱（岐阜県下）を祀る忠魂碑の慰霊祭を執り行いました。遺族や敬神婦人会が参列し、慰霊の念を捧げた。



茶事と祭り

國學院大學名誉教授

倉林 正次

「茶事の梗概

私は茶道に関しては全くの門外漢であるが、祭りを研究している立場から、茶事の構成が祭りとの関係があるのではないかと思っていた。まずお茶事の概要を佐々木三味氏の『お茶事』（淡交新社）で紹介したい。

茶事は「食礼」と「茶礼」の結合と云う。「初座」が、食事とお酒をいただく食礼の席であり、「後座」が、お茶を味わい嗜む茶礼の席である。このように茶事は、「初座」「後座」の二つの行事部分から成り立っている。ところがこの二つの座の間には、「中立」の部分がある。これは「初座」が終ると、客たちは「たんに外に出て、一息入れて寛ぐのである。

初座

茶事は、茶室を会場とするが、席入りまでに種々の次第がある。客はまず「寄付」の部屋で身づくろいをする。

客が濃茶を賞味し終わる頃に、亭主は「お炭を改めさせていただきます」と言つて、炉中の炭をつぎ足す。これを「後炭」と言う。

その後、主客のよもやまの話が交わされる。頃合いを見て、亭主は「それでは、お薄を差し上げます」と挨拶し、主茶碗・替茶碗を使つて、客一人一人に茶が勧められる。

その後、茶碗や箱書きなどの拝見があり、正客は潮時を見て、連客を促して、「今日は一方ならぬ歓迎にあずかり、さらにいろいろの名器を拝見させていただき、ありがとうございます」とお礼の挨拶をする。

亭主が水屋に退くのを見て、正客から順次、床、釜を拝見して、にじり口から退出する。

外に出ると、客たちは飛石の上にあらずみ、一方主人はにじり口を開いて、主客が無言のまま「総礼」をする。これを「送り礼」と言う。亭主は客たちが、待合の方へ行く後姿を見えなくなるまで見送る。こうして、今日の茶事はすべて終る。

次に「待合」の部屋で連客と待ち合わせをする。「腰掛までお通りください」という挨拶で、正客以下「腰掛」に至る。

やがて主人が「迎付」に出る。主人は手桶の水を蹲踞に満たす。次に中門を出て客を迎え、主客向合い無言の礼を交わす。

主人が茶室に戻ると、正客から蹲踞で手水をつかう。次に「にじり口」に進み、茶室に入り、「席入り」をする。床の間の掛物と釜の拝見をして席に着く。

亭主が茶道口を開き席に入り、主客の挨拶が交わされる。次に亭主の「初炭点前」が行われ、客の香合・炭道具などの拝見がある。頃合いを見て主人は「時分時ですから、お湯漬けを差し上げよう存じます」と挨拶をして、これから「懐石」に移る。懐石の最後に菓子が出る。

二、祭りとの比較

「中立」に腰掛で待っている客たちを迎えに主人は「迎付」に中門口まで出る。祭りや芸能でも、この中門口の作法は重要視されている。手水は、神事だけでなく法要などの仏事にも行われる。

「初座」の懐石は、式三献の形をとる。「初座」を「陰の席」と称するのは、大変暗示に富んだ呼称である。この食礼は、周囲に簾を掲げた茶席の中で営まれる。懐石の心は、床に神仏を安置し、供え物を献り、そのお下がりを頂戴し、一粒の米、一滴の汁にも、神仏の慈悲と、天地の恵みを思い、わが生を冥加として、主客その喜びを分かち合い、睦み会うことであると言われる。

これは「神祭り」の心であると思う。神祭りは、司祭者が神に神饌を献供し、そして、神と共にその神饌の品々を飲食することである。しかも、それは厳重な物忌みの場で行われる。「お籠もり」と同じ状況の中で、祭りの食事が神と共に行われるわけである。

中立

菓子を食べ終ると、床の掛物や釜の拝見をして、にじり口から退出する。客たちは座を立ち、再び腰掛に戻り、寛ぎの時を過す。この時の晴れ晴れとした感じは、経験者でないと分からないという。

後座

茶席の準備が調うと、客は銅鑼などの合図の鳴り物聞いて、茶室へ向う。これを「後入り」という。蹲踞で手水を使った後、前と同様の方法で席入りし、「後座」の席に着く。客たちは床荘の花や釜の拝見をして着く。

一方、亭主は手桶を持って蹲踞の水を満たして置く。そして、茶室の窓の簾を全部取り外す。これによって、茶室は急にはつと明るくなる。この時の室内の感じは、また格別であるという。

ここで席は「陽の席」に変わる。これに対して、前の初座は、「陰の席」と言う。初座の席は、室内はほの暗く、雰囲気も客の心を内省の世界へ誘い込んで行った。「陰の席」が終ることにより、

ここで「晴れの席」が展開されるのである。

主客の「総礼」が交わされ、亭主の「濃茶の点前」が始まる。その間に正客の花の挨拶がある。亭主が筥通しをした茶碗の湯を建水に捨てる時分から、正客は沈黙を保つ。やがて馥郁たる茶の香りがほのかにたちただよう。そして、亭主が心を込めて名碗に練り上げた「濃茶」が出される。正客は、それを取りに進み出て、自席にもどり、ここで連客一同感謝の心を込めて、主人に「総礼」を送る。

正客は、茶碗をいただき、茶の練り加減、味、腰の強弱、香り、色合いなどを味わいつつ、三口半に飲む。「お福加減、至極結構でございます」という正客の二言に、亭主の長い心労は初めて報いられる。

こうして、濃茶は次々と賞味され、末席まで回される。主人の心尽くしの一碗の茶を、順流の形でいただく。正客はこの間に茶の銘、香味などがうかがい、茶碗・茶入・茶杓などの拝見が行われる。

「直会」の性格を持つものである。

後座の「薄茶」は、主人も客と座を連ねて、楽しみを共にする座であり、大臣大饗の「穩座」と同じ性格の座であると言える。「穩座」では、主客席を同じくし、管絃を奏し、宴の楽しみに興じる。「穩座」は、祭りの「宴会」に当ると言えよう。

このように見てくると、茶事の構成は、祭りの三部構成に相通するものがあると思われる。ここで意図するのは、茶事のこうした仕組みが、祭りから生まれたものだと言うわけではない。

ここで注目したいのは、仏教儀礼の要素を持つ茶礼が、日本文化の土壌の中で育まれる過程で、わが国の祭りの伝統と無縁ではなかった。茶事その構成を形成する上で、祭りとの深い関係の有したのではあるまいか。

「倉林正次くらはやししょうじ プロフィール」

■大正14年（1925）9月、

埼玉県秩父郡皆野町に生まれ、

國學院大學国文学科卒業。

■現在、備礼文化学会理事長、文学博士。

主要著書

●「宴宴の研究」（備礼編、文学編、祭祀編、歳事、索引編）

●「備礼文化序説」

●「冬から春へ」祭祀文化の展開を探る。